

ヨーロッパを征服するアメリカン・コンフィデンス・ウーマン

—ウォートン『国の慣習』

山 口 ヨ シ 子

I ウォートンのコンフィデンス・ウーマン

イーディス・ウォートン（一八六二—一九三七）が描いたコンフィデンス・ウーマン（女詐欺師）は、ニューヨークやヨーロッパを征服する。『国の慣習』（一九二三）の女主人公アンデーン・スプラッグは、自らの経済的・社会的地位を改善するために周囲の人びとを操り、その望みを達成する。標的にするのは、主にニューヨークの上流社会やヨーロッパの貴族社会であり、彼女は「狙いを定めた」「獲物」¹⁾を確実に手中におさめている。カンサス生まれの「新興成金」の娘は、ニューヨークやヨーロッパの上流社会に入り込み、いずれの社会でも自分の意志を貫いている。

マーク・トウェインは『田舎者の外遊』（一八六九）で、ヨーロッパの実情に不案内であるために詐欺師の餌食になってしまうアメリカ人の状況を明らかにした。このような状況は、ヘンリー・ジェイムズの小説群によってさらに明らかにされ、とくに「四回の邂逅」（一八七七）『ある婦人の肖像』（一八八二）『鳩の翼』（一九〇二）など

では、希望をもって出かけていったヨーロッパでだまされるアメリカ人女性が描かれている。彼女たちは、ヨーロッパの「複雑な社会機構」(ジェイムズ〈2〉 三)のひずみが生みだした詐欺師の犠牲となり、その人生は、夢を実現させるはずの場所で悲劇的な展開を示す。悪に対して無防備であること、道徳的意識が強いこと、理想主義的であることなど、ジェイムズがアメリカ人女性の特徴とみなす性格は、これらの小説では、だまされる要因としての機能することになる(山口〈2〉 一四九―九八)。

ヨーロッパでだまされるこのようなアメリカ人女性の悲劇は、ウォートンが描いたアンディーンには無縁のものである。ジェイムズ同様に大西洋兩岸の世界を描いたウォートンは、『歓楽の家』(一九〇五)や『無垢の時代』(一九二〇)などにおいて、ニューヨークやヨーロッパの古い社会規範に翻弄されるアメリカ人女性の運命を描いている。これら二つの作品の中間に描かれたアンディーンは、両作品のヒロインたちとはきわめて異なった性質を示している。道徳的観念は欠如し、教養も芸術的センスもなく、彼女はひたすら自己の欲望を満足させるために突き進む。彼女にとって、アメリカ東部の都市もヨーロッパも、人に裏切られて悲惨な人生に直面する場所ではなく、自ら策略をめぐらしてその限りなき野心を達成させる場所である。ウォートンは、このようなヴァイタリティあふれるアンディーンを、二十世紀への転換期に生まれた「新しい女」として描いている。

その「新しい女」がアメリカの古い慣習を逆手にとって自らの野心を達成するところに、ウォートンがアンディーンを創造した意図がみえてくる。アンディーンは、アメリカの慣習が女性に許す唯一の方法、つまり、自分の身体を男性に提供する方法によって、社会的・経済的「上昇」を目指す。身を売って男性を操り、出世の階段をのぼるとともに、男性の金銭を消費していく。二十世紀初頭のアメリカにおいて女性が大きな成功の夢を抱いたとき、

自らの美しい身体を武器にするアンディーンのようなコンフィデンス・ウーマンにならざるを得ない状況を、ウォートンは風刺的に描いたといえる。アンディーンの「新しさ」は、「国の慣習」を最大限に利用して、アメリカ東部ばかりか、ヨーロッパまでも征服する、そのエネルギーの強さに強調されるという皮肉を示している。

ウォートンが『国の慣習』をアメリカ的成功物語の女性版として描いたことは（ウルフ 一三二）、アンディーンの野心が男性登場人物のそれと比較されていることでも明らかである。アンディーンの祖父や父は、膨張する産業資本主義社会のなかで生き残りを賭けてビジネスを起し、成功の夢を実現させる。最初の夫にして四番目の夫になるエルマー・モファットも、「浮浪者」から「成りあがつて」巨万の富を築き、鉄道王にのぼりつめる。アンディーンはこのような男性たちに負けない野心をもっているが、その夢を実現させるには、女性であるゆえに異なった方法をとらなければならない。

「開拓者の血」に駆られ、「大西洋の呼び声」に引き寄せられながら、アンディーンがするのは、自分が望む成功を供給してくれるような男性に自分を売り込むことである。男性たちの努力は、ビジネス拡張のために向けられるが、アンディーンのそれは、商取引できる唯一の商品としての自分自身を、コンフィデンス・ウーマンの術策を使って効果的に見せることに費やされる。

ウォートンがコンフィデンス・ウーマンを描くことで風刺するアメリカの慣習は、シャロット・パーキンズ・ギルマンの『女性と経済学』（一八九八）におけるつぎの主張に要約される（ジョスリン 七〇）。

人生に直面する若い女性には、若い男性同様の世界がかなたに広がり、その心のうちには、男性同様に、人間

としてのエネルギーや人間としての欲望や野心がある。だが、女性が獲得したいと望むものすべて、行いたいと望むことのすべては、一つのチャネル、一つの選択をとおして実現されなければならない。富、権力、社会的地位、名声―このようなものだけでなく、家庭や幸福、評判、安楽、快楽、生活の保障などもすべて、小さな金の指輪をとおして女性のもとにやってくる。(七一)

ギルマンは、このような「国の慣習」への打開策として、女性の経済的自立を訴えた。『ベニグナ・マキャヴェリ』(二九一四)をはじめとするギルマンの小説の多くは、女性が社会的責任を果すことの重要性を説き、女性がいかに自立を達成できるか、その具体的な方法を紹介している。だが、ウォートンが描いたアンディーンには、ギルマンが主に中産階級女性に示したような堅実的な打開策は有効ではない。「富、権力、社会的地位、名声」への果てしない欲望をもつアンディーンが、階級をこえ、大西洋をこえてその欲望を達成するには、やはり古い慣習を逆手にとるしかない。

アンディーンは、結婚と離婚をくり返すことで自らの「富、権力、社会的地位、名声」を手に入れようとするが、これは「競争と征服」という資本主義社会の「ゲーム」に参加を拒否された女性の苦肉の策でもある(ウルフ 二二二)。「平均的アメリカ人が金を所有することでこの世のすべての不幸はかならず解決できると信じ」、「誰もパワ―を求めていた」(マシセン 一三〇)二十世紀初頭のアメリカで、男性ならばビジネスの世界で求める金とパワ―を、アンディーンは結婚することで得ようとする。ウォール街での闘いを拒否されているために、女性に与えられている結婚という闘いの場で、自分を株として取引することで闘う(アモンズ 三三二)。結婚制度をビジネス

に利用する自分のゲームをするのである。セオドア・ドライサーはじめ多くの男性作家が男性を主人公にしてビジネスと金についての物語を書いていたなかで、ウォートンは、女性が金とパワーを求める物語を女性の視点で書いたのである（ウルフ 二二二）。

アンディーンが結婚制度をビジネスとして利用するゲームをする際に重要な役割を果たすのは、ジャーナリズムである。雑誌や新聞は、彼女が抱く成功の夢のあり方に影響を与えるばかりでなく、ゲームを動かす鍵ともなる。二十世紀初頭のアメリカでは、上流階級の女性が公的空間に進出する機会が増えたばかりでなく、その容姿や活動が仔細にわたって社交新聞などで報道されるようになった（モンゴメリー 一四二）。アンディーンは、社交界の動向、ファッション、生活様式などを伝える新聞などを読むことで上流社会への夢をかきたてられ、その社会への参入を企てる。中西部の小さな町に住んでいた少女が、ニューヨーク上流階級の御曹司、さらにはフランス貴族と結婚することで成功の夢を叶えようとするには、当時の社交ジャーナリズムが強く影響している。

本稿では、アンディーンを「国の慣習」を逆手にとってニューヨークやヨーロッパを征服するコンフィデンス・ウーマンととらえ、その術策や価値観を分析したい。さらには、彼女がそのような術策や価値観をもつに至る要因として、ジャーナリズムの果たす役割を考えたい。

Ⅱ ビジネス・ウーマンからコンフィデンス・ウーマンへ

アンディーンのコフィデンス・ウーマンとして特徴は、その名前に暗示されている。アンディーン (Undine) という名前は、ドイツのロマン派作家フリードリッヒ・デ・ラ・モット・フーケによる魂のない水の精についての

物語『ウンディーネ (Undine)』(一八一)に由来している(ローソン 二九)。二十世紀初頭のアメリカに生きるウォートンの水の精は、フーケが描いた美女と同じく、美しい身体をもちながら魂をもたない。

アンディーンは十代から十数年のあいだに四度結婚し、一人の男性の愛人になるが、そのいずれの関係においても、男性に対する個人的な愛情を第一義とすることはない。フーケの水の精のように、結婚し子どもを産むことで魂を獲得することもない。アンディーンにとって、男性たちとの関係は、「ビジネスのような熱意をもって自分の目的を達成する」ための手段にすぎない。その目的が究極的には地位と富の獲得にあるために、アンディーンはそれらを手に入れるために男性を利用するコンフィデンス・ウーマンということができる。

アンディーンが「ビジネスのような熱意をもって」男性を操るコンフィデンス・ウーマンであることは、彼女の名前のもう一つの由来と深くかかわっている。アンディーンは、生まれた週に祖父が市場に出したヘアカラーの商品名に因んで命名されている。「アンディーン」という名は、実母の説明によれば、「髪にウェーブをかける (onduler)」という意味のフランス語に由来している。「名前をつけることにこのうえない特技を発揮した」というアンディーンの母方の祖父は、「名前が名乗る人を選ぶとつねに考えていた」という。祖父の発明した商品名を名乗っていることは、アンディーンがビジネスの申し子であり、自分を商品として売りだすことを生まれながらに運命づけられていることを示している。

アンディーンは、その名前が示すとおり、自らの美しい身体を売るビジネス・ウーマンである。自分を差しだし、購買者の地位と金を手に入れるという商取引において、「ビジネスの抜け目なさ」を発揮するために、彼女はコンフィデンス・ウーマンとなる。購買者の望む商品売る優れたビジネス・ウーマンが、コンフィデンス・ウーマン

になるには、その抜け目ないビジネスに「だまし」の要素が含まれることが鍵となる。唯一最高の商品である「自分の美しさに信頼をおく」ビジネス・ウーマンは、その「美しさをいかに使うか」にビジネスをこえる作為を施すことで、コンフィデンス・ウーマンとなる。

アンディーンがコンフィデンス・ウーマンであることは、何よりも、「自らの美を劇的に表現して」多様な自分を作りあげるその手腕に証明される。自分を売り込むビジネスにおいて、彼女は購買者によって変幻自在に自分を変える。二番目の夫になるラルフ・マーヴェルは、アンディーンに会った当初から、彼女のなかに「多彩で変わりやすい (divers et ondoyant)」ものを発見している。「髪が波うつ (ondoyant)」という名前のイメージとも重なるこの特徴を、ラルフはアンディーンの柔軟性ととらえ、ニューヨーク社交界への案内役を自ら務めようとする。だが、ミッシェル・ド・モンテーニユの『随想録』から引用されたこの言葉ほど、アンディーンのコムフィデンス・ウーマンとしての特徴を明確に説明するものはない。「多彩さ」や「変わりやすさ」は、彼女が自分の見込んだ男性の好みに合わせた自分を作りあげ、自分を購入するよう仕向けることに発揮される。

じつさい、アンディーンがラルフに対して演じるのは、「安っぽい社交界」の「愚劣な権力の犠牲」になる危険を秘めた「ヴァージン・イノセンス」である。彼女がこのときすでにエルマーとの結婚と離婚を経験していることを思えば、その自己演出の巧みさを指摘しないわけにはいかない（アモンズ 三三三）。自己演出が人によって変わることは、彼女がラルフのつぎに夫にしたいと願うピーター・ヴァン・ディージェンに対して演じる姿をみれば歴然である。アンディーンは、ニューヨーク社交界きつてのプレイボーイであるピーターの前では、彼に匹敵するような情熱的な女になっている（ド・グレイブ 二四二）。ピーターとの略奪結婚に失敗した彼女がそのつぎに選

んだ男性、レイモン・ド・シエール侯爵に対しては、ヨーロッパにふさわしい「詩的な」美しさを演出することになる。彼女の「多彩で変わりやすい」性格は、ラルフが想像したような、「新しい印象に対する感受性」や「世界の多様な魅力に対するすばやい反応」の表れでなく、詐欺師が自分の「カモ」に発揮する変幻自在性となる。

相手に合わせて異なった自分を演出する演技力は、アンディーンが子どもの頃から培ってきたものである。同年代の友だちが、人形や縄跳びなどに夢になっていた頃から、アンディーンが好んだ遊びは演じることである。

アンディーンの主な喜びは、母親のよそ行きのスカートをはき、洋服タンスの鏡の前で「貴婦人ごっこ」をすることであつた。この趣味は子ども時代からずっと続き、彼女は今もなお同じような秘密のパントマイムを演じていた。音もなく部屋に入り、スカートをきちんと整え、扇子を揺らし、声をたてない話や笑いに唇を動かしていた。

アンディーンは、このような「ごっこ遊び」をとおして、「なりたい自分」になる訓練を長年してきたことになる。その出来映えを鏡の前で確かめるやり方で、本来の自分とは異なる自分を演じる訓練は周到なものとなる。その顔は「まばゆい光が輝く劇場」にさえ譬えられ、彼女は虚構を演じる一人劇団の様相を呈している。くり返し用いられる鏡と光のイメージは、変幻自在で正体の掴みにくい彼女のコンフィデンス・ウーマンとしての特徴を増幅する（ジョスリン 七七）。

結果的には周到な訓練の賜と思える演技力も、アンディーンの場合、計画的に磨いたわけではない。彼女はコン

フィデンス・ゲームの強力な武器となる演技力を、つねに他人を真似する日常のなかで培っている。「圧倒的な独創性でみなを驚かせたいと望みながらも、いつも会ったばかりの人を模範にせざるを得ない」と作者が説明するうちに、アンディーンはその「著しい独創性の欠如」のために他人を模倣する習慣が身につき、結果として、詐欺師のもっとも基本的な武器ともいえるべき変幻自在性を発揮するようになったといえる。ラルフも結婚後にこのようなアンディーンの習癖に気づき、「一緒にいる人が誰であれ、その人に自分を適応させる本能」と呼んでいる。アンディーンは「着る服同様、話し方、身ぶりなどに他人を一念に真似る本能」を示し、手に入れた男性が好むような女性に自在に変化している。

アンディーンは次つぎと嘘を紡ぎだし、その変幻自在性は外見だけでなく、言葉によっても形作られる。ウォートンはアンディーンの身体を「若々しくしなやか」と形容し、その柔軟なさまを「彼女はいつも急角度に身をかわり、身体をよじっている」と説明する。この身体の描写は、「水の精」などに譬えられるアンディーンの流動的なイメージと呼応するが、同時に、「獲物」を得るために嘘をついて身をかやす彼女の習癖とも重なっている。

ラルフは結婚後、妻が「日々小さな嘘、言い逃れ、ごまかし」をすることに「絶えず恐怖を感じる」ようになる。従妹の夫ビーターとの関係を疑いながらも、妻が「新たな嘘」をつくことを恐れて問いたすことができない。彼は妻が「ずっと言い逃れを続け、身をかわり続けて、自分が妻をみつめるように自分をみつめるだろう」と思いうからである。「最後には、そのゲームで妻がかならず自分を打ち負かす」ことを知っているためでもある。アンディーンの柔軟性は、ラルフが結婚前に思ったような「順応性」ではなく、自分を他人に適応させて身をかやすわざである。言葉をも駆使して「身をかまし(doubling)」、つねに他人を真似して虚像を作り続けるアンディーンの実行

は、それが彼女自身の金銭的・社会的利益を目的としているために、詐欺師のものとなる。

演じることは嘘を真実らしく見せることであるが、アンディーンは自分の演技をおきなう工作も積極的に行う。前夫エルマーがニューヨークに出てきていることを知ると、セントラル・パークに彼を呼びだし、自分の過去が暴かれないように口止めをする。ラルフや彼の家族に対して無垢な娘を演じている彼女は、離婚の前歴が明かされて婚約解消になることを恐れ、苦勞の末に手に入れた好機を守ろうとする。「付き添いはどこにいるのか」とエルマーにからかわれるが、彼女は自分が演じているような無垢な娘であれば決してしないような行為にたった一人であり、積極的に交換条件まで出して駆け引きを行っている。上昇志向の強いエルマーの方も、二人の過去を黙する見返りにビジネスで利する情報を要求して、二人の交渉は成立する。アンディーンは自ら作りあげた虚像をこのような努力によって守っている。

アンディーンの変幻自在性は、その所有欲と深くかわるものである。レイチェル・ボウルビーは、『ちよつと見るだけ 世紀末消費文化と文学テキスト』において、消費資本主義社会に生きる人間の没個性化を指摘している。ジャン・ボードリアルの『消費社会の神話と構造』における主張を踏まえながら、個人が「規則的に新しいモデルが出ることにそれに合わせていき、金で買うことのできる衣服や車などの事物をとおして身につけられたアイデンティティを変えていく」(二六) 状況を述べている。「商品が人を作り」、人は所有している事物によって、「読みとり可能な一個のオブジェ」になる状況である(二六)。

アンディーンは最新流行の品々を購入するような感覚で次つきとつき合う男性を変えていくが、彼女にとって男性は欲しいものを購入する金を提供する存在だけでなく、最新のファッション同様の意味をもつ。購入した高価な

品々同様に、自分のアイデンティティを証明する手段となるのである。アンディーンはつねに「最高のものが欲しい」と願い、その目的のために邁進する。彼女にとって、男性が最高のものを手に入れる唯一の手段であり、最高のものを求める欲望に際限がないので、彼女が男性を次つぎと変え、男性が変えることに自分を変えすることに不思議はない。

このような彼女の行為を支えるのは、「簡単な離婚」を是認する考え方である。アメリカにおいて離婚はつねに西部において「自由化」されてきた経緯があるが（マッコウム 七七二、ウォートンも「離婚は例外なくするに値するもの」ととらえるアンディーンの考えを西部人のそれとして描いている。「離婚した女性には、ありがたいことに、依然として断然不利な立場にいます」というニューヨーク上流婦人の発言に対して、カンサス州アペックス出身のアンディーンは驚きを示す。「アペックスでは、結婚した男性が期待に添わなかったら、夫を変えたいと望むのが娘の甲斐性だとみんな考えています」と言い返し、ニューヨークとは異なる西部の「常識」を披露している。美を演出することで結婚相手を獲得し、最高のものを手に入れようとするアンディーン(12)のコンフィデンス・ゲームは、離婚の簡易化を肯定的にとらえる考えに支えられている。

アンディーンをコンフィデンス・ウーマンに駆りたてるのは、最高のものを求める欲望の強さである。彼女にとって最高のものとは、「楽しみと社会的体面」であり、その楽しみは個人的なものではなく、「大勢の人のなかで目立つことや無差別の人間関係」のなかにある。彼女が心から喜びを感じるのは、「自分のもっているものが他人に羨ましがられていることを確認する」ときや、「大勢の賞賛に映しだされた自分の魅力を中心に描く」ときである。

ニューヨークを代表する名家の出であるラルフとの婚約に漕ぎつけたときも、アンディーンが感じる「甘美な喜

び」は、「すべての新聞に報道されたこと」や、劇場で「好奇心に満ちた無数の視線を集めたこと」にある。彼女は「いわゆる上品な女性を好まないことで有名な」ピーターとつき合って噂の対象となるが、このときも、「俗悪な魅力に打ち勝ったという思い」や、「そのような男性に影響を与え」、「自分の地位をあげることができた」という思いによって「喜びを感じている」。

ラルフと結婚していながら新興成金のピーターに関心を移すのも、「将来が人目を引くものや混然としたものであるべきなのに」、自分が古い名家の「排他性や野暮つたさに身を任せてしまっている」と感じるためである。彼女はじつさいピーターとつき合うことで、金の心配なく「欲しいものをすべて買い」、「美しく装う」という、「貧しい」ラルフには提供することができなかった生活を楽しんでいる。ピーターは「欲しいもののすべてを金で計算し、しかもそれらを買うのに十分な金をいつももっている人である」。

作品では、アンディーンの自己演出の巧みさに「だまされた」ラルフが美しい見かけに隠された実像を分析することに多くの頁が割かれている。「多彩で変りやすい」アンディーンに翻弄され、妻が正体のわからない「ストレンジジャー」であることに困惑するラルフの心情が、未完の文や疑問文の多い文章でつづられている。彼はやがて、「外見的には非常に順応性があるのに、心の接触には無頓着であり続ける」妻を、「快楽の光線の小さな断片」のように「上辺の反応をくり返す人物」と思うようになる。自らが引用する「人間くらい驚くべく空虚で、多彩で、かつ変化してやまないものはない」(一二) というモンテーニュの一節を証明するかのように、多様に変化するアンディーンのなかに「驚くべき空虚さ」を見るのである。

ウォートンは、「独立戦争の伝統を引き継ぎ玉座に座ってニューヨークを支配してきた『旧家』の御曹司が、カ

ンサスの「童卷のような」若い娘に「侵略」される様子がある種の同情をもって描く。ニューヨーク上流社会の閉塞性やひ弱さを指摘しながらも、その筆致には、慎ましい古き伝統が、快楽を優先する新しい価値観に浸食されることに對する憂いが表れている。

その一方、ウォートンはアンディーンの欲望の強さを開拓者精神に結びつけ、「あなたにある何か」を求めて邁進する彼女の根本には「無垢な」ものがあることを強調する。アンディーンは「もつと贅沢で、もつと刺激的で、もつと自分にふさわしいもの」があるに違いないと、いくつかの都市を試した末にニューヨークにたどり着く。ニューヨークでは「衝動に身を任せて」自らが詐欺師にだまされる苦い経験もするが、そのような経験をつぎの計画に生かす努力もいとわれない。果てしない野望を胸に抱き、「自分に自信をもち」「すさまじい独立心をもって」一步步つ努力を重ねる姿を、ウォートンはかつてアメリカの西部に夢を賭けた人びとの姿とも重ねている。中西部の田舎町に育った娘が「おさえがたい開拓者の血」に駆られて「大西洋の呼び声」に応じる姿として描いている。

アンディーンは、男性に「すべて」を期待すると言いつち、男性を介して夢を実現しようとする。「完全なる勝利はひたすら自分の魅力によつてもたらせる」と考え、自分の美しさを脚色し、有効に使うことに専心する。コンフィデンス・ゲームは、アンディーンにとって、美しさを金銭に変換すると同時に、社会的なパワーに変換し、「すべての苦難を切り抜ける」手段である。

ウォートンは、もしアンディーンが女性でなかったら、このような方法に頼らずに、その限りなき欲望を達成する方法があることを示唆する。「生まれ故郷の童卷」同様、「すべてを自分の前に平伏せさせる」エネルギーをもち、抜け目ないビジネス感覚をもつアンディーンが、男性を操らなければ野心が達成できないことを風刺している。彼

女の「人生」の段階を説明するかたちで、「キャリア (career)」という語が何度も用いられるが、その語は、彼女が男性を操ることを「職業」にしなければならない皮肉を反響するばかりである。

Ⅲ 「国の慣習」への復讐

アンデーンは、「国の慣習」に復讐するコンフィデンス・ウーマンである。ウォートンはアンデーンを「アメリカの結婚制度が生み出したこのうえなく完璧な生産物」ととらえ、彼女がそのシステムの「ペテン」に対する復讐として、男性の金を浪費するという主張を展開する。チャールズ・ボーウエンなる「社会学者」の視点をもつ人物に「アメリカの結婚制度の全般的問題」に対する見解を述べさせ、何度も結婚することによって自分の野望を達成するアンデーンのようなアメリカ女性が生まれる背景を分析させている。

ボーウエンによれば、「平均的アメリカ人は自分の妻を見下している」という。女性に関心をもたず、仕事に興味をもつように教えてこなかった結果、「女性のためにあくせく働くことがアメリカの古い伝統」になったが、多くはもはや信じていない教義に身を捧げているという。金を儲ける情熱が金をどう使うかを学ぶことよりも優先される国にあって、男性は他にどう使ったらよいかわからないので、妻に惜しみなく金を使うのだと、ボーウエンは主張する。金銭的には女性のために大いなる犠牲を払っているが、その実、家庭よりもビジネスに刺激を求め、愛をおさなりにしているとも言える。もし男性が昔のように素朴に自分のものだという思いで女性を愛していれば、「簡単な離婚」がはびこるはずがないというのが、ボーウエンの意見である。「その結果、女性たちはどのような復讐をするのでしょうか？」と彼は続ける。

気の毒にもだまされた女性たちが、仕事に夢中の男性に投げてもらった余りもので飾り立てようとすると空しい努力をしているのを見ると、私は彼女たちに全幅の同情を寄せてしまいます。金や車や服などで飾り立て、それが人生の本質だと自分たちに言い聞かせるふりをしているのを見るとときです。……でもあちこちにこのペテンをつねに見透かし、金や車や服はただ単に男性の邪魔にならないようにしている代わりに支払われている大きな賄賂だということを知っている女性がいると思います。

ボーウエンの分析は、ソースタイン・ヴェブレンが『有閑階級の理論』（一八九九）で指摘する有閑階級の女性に課せられた役割を、女性への同情を込めて説明するものである。女性自らが家の「主要な装飾品」(ヴェブレン一八〇)としてきれいに着飾り、「顕示的消費」(七五)を重ねることで戸主たる男性の名声を確認するためにその経済力を誇示するという役割である。⁽³⁾

ウォートンはそのような役割を課せられた女性の苦悩を、『国の慣習』にさきだち、『歓楽の家』の女主人公リリー・バートをとおして詳細に描いている。男性の「動産」(ヴェブレン 五五)になる結婚を女性の「天職」とする社会のなかで、そのような結婚を拒否して死を選ぶリリーの悲劇は、女性を人間として認めない慣習の理不尽さを告発する。自分の美を売って金持ちの結婚相手射とめることが唯一無二の生計手段と教育されたリリーが、その理不尽さに目覚め、労働による自立に挑みながら挫折する姿に、装飾品から人間になれなかった「女の惨めさ」が表れている。

ウォートンはリリーを描くことで感じたに違いない女の怒りを、アンディーンを描くことで発散させている。アンディーンは仕事を「男性の領域」ととらえ、自らが仕事して金を稼ぐことなど思いもしない。そればかりか、「男性がビジネス街に向く理由は自分の女性に戦利品をもちかえるため以外にない」と考え、男性が作った金をひたすら消費する。「欲しいと思うものを手に入れる明白な力があるかどうか」を基準にして男性を評価し、結婚を自分の欲しいものを手に入れる当然の手段と考える。リリーのように男性の装飾品である「女の惨めさ」を嘆くことはなく、むしろそのような慣習を逆手にとつて自らの成功の夢を実現させている。ポーウエンはアンディーンをアメリカの結婚制度を自分のために利用した「勝利者の完全なる証拠」とみなすが、彼女にとつて、結婚は「かなたのさらによいもの」を求める自分自身のキャリアになっている。アンディーンは、リリーができなかった結婚を何度もして自分の利をはかり、彼女の仇を討っている。

アンディーンがリリーの仇を討っていることは、生計のために働くという観念のなかったラルフを単なる「マネー・メイカー」にして苦しみ、自殺に追い込む筋書きに表れている。『国の慣習』では、慣習に苦しめられて自殺するのは、美しく着飾って男性の経済力を誇示する役目を担う女性の方ではなく、女性が送りつける服や宝石の多額な請求書に苦しめられる男性の方である。

「無垢な」妻を「指導して」、貴族的的生活を送ることを目論んでいたラルフを、アンディーンは自分の装飾品代を稼がせるためにビジネスの世界に送り込む。ラルフは、限りなく消費を続ける妻の請求書を払うために、自ら嫌い軽蔑するビジネスの世界で奮闘したあげく、家族を守る十分な金がないという理由で自らのこめかみをピストルで打ち抜いている。アンディーンは、アメリカの慣習に「このうえなく完璧に」従うことでラルフを自殺にまで

追い込み、その慣習に苦しめられた女性の復讐を果すことになる。

アンディーンは、男性が定めた「女の領域」で男性同様の出世ゲームを行うことによって、女性を「見くだす」アメリカの慣習に復讐する。彼女は「あふれる行動力」や「休止することのないビジネスの抜け目なさ」をもち、金と権力への強い執着をみせるが、そのような性格はビジネス・マンである父親から受け継いだものとして描かれている。祖父が作ったヒット商品名を名乗るアンディーンは、職業遍歴を重ね成功と失敗をくり返した祖父の象徴的な後継者でもある。

彼女のコンフィデンス・ゲームは、金を手に入れ社会的階段をのぼるために父や祖父がしたことと同じであり、彼女はそれを結婚という場でしているにすぎない。父や祖父の生き方を引き継ぎ、金とパワーを求める資本主義社会の競争を「女の領域」で行っているだけである。女である彼女には、結婚制度を利用し、男を操るゲームを行う以外、「手に入れることができないものを求めて長い闘いをする」というアメリカの伝統を継承する方法がないからである。

アンディーンの実親は、コンフィデンス・ウーマンの術策で夢を叶える娘の模範である。成功したビジネス・マンとして、娘の上昇志向を資金面で支える力をもつが、成功のきっかけは、妻の父親の土地を接収したことにある。彼は子ども二人を伝染病で亡くしたことで「浄水運動」を始め、負債の形（かた）に接収した土地を浄水場建設のために市に売って財を成している。人の不幸も自分の不幸も抜け目なくビジネス・チャンスに結びつけ、貧しい一介の少年から「成りあがつて」娘の野心を後押しするに十分な経済力をつけている。その金儲けの秘訣は、何よりも「ビジネス信条が伸縮自在な」ことにある。その柔軟さは、娘の結婚資金作りに窮すれば、彼がビジネス・パー

トナーを敵に売りわたすことにも表れている。

アンディーンは、「ビジネスの本能」、断固たる意志力、熱意、行動力などをこの父親から受け継ぎ、そのような性格を「女の領域」におけるゲームで発揮する。求愛するピーターの操り方は、父親が「浄水運動」によって曰く付きの土地を売る術策にも譬えられ、結婚している身でピーターと同居する決断は、「ウォール街のきわめて適切な手際」に比較されている（アモンズ 三三三）。

アンディーンの名づけ親である祖父は、彼女がアメリカの男性文化を「女の領域」で発揮することの意味をより明らかにする。祖父の人生は、アンディーンの母親をとおして語られるにすぎないが、スラッグ同様、独力で成功を勝ち得たセルフ・メイド・マンとしての「いかがわしさ」を秘めている。

父は薬屋として人生のスタートを切ったわけではありません……。葬儀屋として仕込まれ、一流の商売にしました。でもいつもすばらしい演説をする人だったので、その後いつの間にか牧師業のようなものに出すようになりました。もちろん牧師も同じくあまりお金にはなりませんので、結局、ドラッグストアを開いたのです。父の心はいつも説教台にありましたが、薬屋家業も一流にしました。ヘアカーラーで大成功を収めたあと、アペックスで土地投機を始めたのです。

アンディーン祖父の人生は、その最後に娘婿に土地を接収されることを含めて、熾烈な生存競争の記録そのものである。援助してくれる係累もなく、たった一人で挑んだ生き残りの闘いにおいて、彼が他を出し抜くコンフィ

デンス・ゲームをくり広げたことは容易に想像できる。法律、経済、社会秩序が確立されていない中西部で、売薬販売、説教、土地投機にかかわっていたという彼の過去は、十九世紀のアメリカで各地の地方新聞に掲載されて人気を博したユーモア話に登場するコンフィデンス・マンに共通するものである（山口〈1〉 二七—三三）。

アンディーンがこの祖父に見込まれてヘアカラーの名前を与えられていることは、彼女のコンフィデンス・ウーマンとしての血筋をこのうえなく保証する。彼女の場合、闘いの場は東部の都市やヨーロッパであり、挑む「職業」はアメリカの慣習に従って結婚のみであるが、障害をかわし、人を操りながら上昇を目指して突き進む生きざまに、この祖父の血を確認することができる。その血は詐欺師らしい雄弁述にも確認され、ラルフは、アンディーンの話し方に「説教するおじいさんの言葉遣いがところどころ受け継がれているようだ」と感じている。本を開くことのないアンディーンが「決して話し言葉でつまるところはなく」、「現在使われていない語彙を使って流暢に話す」からである。

アンディーンが資本主義国家の「競争と征服」という闘いを「女の領域」ですることの意味は、その人生を同世代のエルマーのそれと比較することによってさらに明確になる。約十年のあいだにアンディーンと二度結婚するエルマーは、その短いあいだに巨万の富を築く。アペックスのドル靴屋のカウンターで働いていた彼が、五番街にピッティ宮殿を模した邸宅を建て、ふたたび妻となったアンディーンにかつてマリー・アントワネットが所有していた宝石を贈るほどの財力をつけている。慈善活動にも精をだして「まったくの実利主義者ではない」ことを示し、名士の仲間入りも果している。

カンサスからニューヨーク、ヨーロッパへとそのパワーを拡大するという意味で、エルマーはアンディーン

「分身、男性の自己」(フレンチ マキシ)ともいえる人物である。彼はアンディーンが男として生まれてきたならば勝ち得たであろう成功を示す役割を担っている(シヨーウォールター 九〇)。ウォール街が女性に閉ざされていなければ、アンディーンが美を磨いて男性を射とめることはかりにエネルギーを使うことなく、エルマー同様の成功を勝ち得たと思われる理由は、その成功の秘訣が彼女同様の詐欺師の術策にあるからである。

アンディーンとエルマーが似た者同士であることは、自らに対する自信や失敗にくじけない逞しさなどさまざまな面で確認できる。そのような類似点でもっとも際だっているのは、二人がともに果てしなく大きな野望をもち、その目的を達成するために伸縮自在な態度をとる点である。それは詐欺師の手腕で成功の夢を達成すると言い替えることもできる類似点である。「最高のものを手にしたい」という「猛烈な欲望と冷徹な粘着力」を内に秘めながら、その欲望を達成するために、表面上はしなやかに身をかわし、人に合わせて変化する柔軟性をもっているということである。

このような特徴は、アンディーンの場合には「多彩で変りやすい」と形容されるが、その形容はそのままエルマーにもあてはまる。つねに「血色のよさ」「ずんぐりした体格」「狡猾さ」「着飾りすぎ」などが強調され、エルマーはウォートンのなかで固定観念としてあったに違いない、ニューヨークを「侵略する」成金の「俗悪な」イメージを体現する⁽⁴⁾。俗悪さは、「成りあがった」後も変わらない彼のくだけた話し言葉にも表れている。

だが、アンディーンはそのような不変のイメージを放つエルマーに「変化」の可能性を見ている。その「顔つき」に「自分が演じたいと思うどんな人物にもなれる能力がある」と感じている。アンディーンがエルマーに確認するこの能力こそ、彼女自身が男性を獲得するために発揮する変幻自在性につうじるものであり、同時に、彼が経済的

成功を勝ち得る要因でもある。ビジネスのことを話すエルマーは、ラルフによれば「偉大なる役者が自分の役を分析している」ようでもある。

エルマーはじつさい偉大なる役者ぶりを發揮し、「ウォール街の支配者たちのあいだでつねに傑出した」地位を保つようになって、多様な面をみせその正体を明かさない。「彼の人となりについての意見も、話す人の見る角度によって多様に異なる」。「その辛辣で厳しい人間性を強調しようとする試みが成されるたびに、守護神が神祕のヴェールを彼のうえに投げかけるように思われ」、結局、彼はどういふ人だかわからないままである。どこからやってきたのか、どこから情報を得るのかわからないその神秘性に加えて、人によって、時によって異なる顔を見せることで、彼は誰にとってもストレンジャーであり続けることになる。それこそが、あらゆることに柔軟に対処し、「彼が最終的には自分の欲しいと思ったものを手に入れる」方法である。

エルマーがビジネスの世界で發揮する柔軟性とは、たとえば、同じ人物を時によって敵にも味方にすることに表れている。組織の内部情報を不正に操作することで成り立っている彼のビジネスには、雇い主に対する忠誠心や個人としての道徳心はない。元妻の父親を買収して雇い主のために情報を得ても、利益を得たつぎの段階には、その雇い主も敵にまわす変わり身の早さをみせる。内部情報を買って裏切った敵方とも、機が熟せば組んで仕事もし、欲しいものを手に入れるためには、敵も味方も自在に操作する。鉄道王になるのも、そのビジネスのやり方からすれば、不正な情報操作による土地買い占めで乗っ取った結果であることは想像にかたくない（プレストン 一〇九⁽⁵⁾）。

エルマーの柔軟性はアンディーンとの関係でも同様にみられ、彼はふたたび妻にするまでおよそ十年ものあいだ、彼女を柔軟に待ち続けている。最初に駆け落ち結婚したときは、他の男性と婚約していた彼女を奪いといった結果で

あるが、彼女の父親が力づくで引き離せば、その強い力に従ってもいる。強引に略奪したり、忍耐強く機を待ったり、そのときどきの状況をとらえながら、最終的には、「とてつもなく」欲しいと思っていた彼女を手に入れている。

エルマー自らアンディーンに語る成功物語が「策略と逆計の壮大な独演会」と形容されているように、彼の柔軟性はコンフィデンス・マンの術策そのものである。そのことを証明するように、エルマーの話を聞いているアンディーンは、彼の発する「意味をもたない音節」や「専門用語」を理解している。「どのウォール街用語も五番街の言語に相当するものがある」からである。性別役割分業社会ゆえにウォール街と五番街とにその居場所を別にして、二人が同様に詐欺師の手腕で人生を歩んでいるということを示している。

フランス貴族と結婚していた当時のアンディーンは、エルマーが「自分の言語を話し、自分の意味を理解し、習った言語にはない根深い欲求をみな本能的に理解する」ことに救われる思いを抱く。エルマーが本能的に理解するアンディーンの言語とは、ただ単に母語としての英語を意味しているだけではない。「変化と興奮を糧に」抜け目なく新時代を生きるアメリカ人としての生き方をも意味している。

ラルフは、皮肉にも妻が前夫と交わした約束を果たすかたちでエルマーに引き会わされ、「なにか英雄的なもの―勇ましい厚かましき」を感じる。「大きい闘いの場を必要とし、おそらくは大きな失敗も重ねるが、最後には到達したいと思うところにたどり着く」とエルマーを評価し、その英雄伝説を書きたいと願う。エルマーのビジネス世界からもっともかけ離れた観念的世界に住むラルフには、彼の物語を書くことはとうていできず、その本は最後まで書かれることはない。

だが、ラルフが書きたいと願ったような英雄伝説を書くことは、じつさい、エルマーのように短期間で財を成す人物が続出する二十世紀初頭のアメリカでは「流行」(ウルフ 二二二)であつた。ウォートンはそのような流行を知りつくしていたばかりでなく、女性を中心に据えてビジネスと金の物語を書くことで、その流行のさらに先端を行つたといえるだろう。

女性を主人公にして流行のビジネスと金の物語を書くことが画期的だったことは、当時の書評にアンディーンを否定的にとらえるものが多いことに裏づけされている。たとえば、出版直後の『ニューヨーク・タイムズ書評』でアンディーンは、「もつとも嫌悪感を起させるヒロインで、怪物のようで、人間とは思えない」(タトルトン 二〇四)と評されている。「欲の権化で、良心も、愛情もない」(二〇四)と、伝統的な女性像にはみられないアンディーンの性格が強く攻撃されている。

アンディーンはたしかに強欲であるが、そのような性格は、先に確認したように、父親、祖父、エルマーなどにも共通するものである。彼女はアメリカ文化を継承・実践しているにすぎず、そのことは彼女がイニシヤル(CS)をアメリカ国家(CS)と共有していること、さらにはそれが「私たちみな」を意味していることに強調されている(ヘイズ 二二二)。妻子のために金作りに奔走するアンディーンの父親を「好ましい」と評する一方で、その性格を強く受け継ぐ娘を「怪物」とみなすこの書評は、逆に、そのような女性をヒロインに据える物語を書いたウォートンがいかに時代の流行を先取りしていたかを示す結果になっている。

アンディーンが策略をめぐるして男性から金を絞りとろうとすることは、男性中心社会を当然と考える読者からみれば「不愉快きわまりない」ことかもしれない。しかし、ウォートンがアンディーンを祖父、父、エルマーと比

較し、歴史のバースペクティブのなかでヒロインをとらえようとしているように、「欲の権化」とみなされるその行為は、アメリカが産業資本主義国家として拡張する過程で男性が行ってきたことと変わりない。しかもアンディーンは、その行為を男性が作ったルールに従って「女の領域」で行っているにすぎない。男性がすれば他を出し抜く才覚とみなされ「英雄」となる行為を、女性がすれば「怪物」とみなされるところに、ウォートンがアンディーンのコμφイデンス・ゲームに復讐の意味合いをもたせている最大の理由がある。

Ⅳ 「アメリカン・ビューティ」のヨーロッパ攻略

アンディーンが挑む最大のコμφイデンス・ゲームは、三番目の夫レイモンと結婚するにあたってくり広げられる。フランス貴族との結婚作戦は、ラルフとの離婚後、ピーターを愛人から夫にできなかったアンディーンが、深い敗北感をもって挑むものであり、彼女の抜け目なさをもっとも発揮されるものとなる。ニューヨーク式仮面夫婦を演じるピーターを略奪できなかったアンディーンが、「離婚したばかりのアメリカ女性」としてカトリック信者との結婚を計画するものであり、その抜け目なさは宗教をもだましの対象とするほどになる。そればかりか、ローマ教会を買収する金を入れる手段として、ラルフとの結婚でもうけた一人息子さえ、策略の手段に利用する。「簡単な離婚」というアメリカ西部の慣習を実践するアンディーンが、男性は家族経済の担い手であるべきというアメリカの「国の慣習」を盾に、離婚を認めないヨーロッパのカトリック社会に闘いを挑んでいる。

アンディーンがヨーロッパを結婚市場として選ぶのは、「父親から受け継いだビジネスの本能」によって、自分が求める「獲物」の在処を「その方向に」「見定める」ためである。ニューヨークを目指す過程で知り合った「野

暮つたい娘」が、爵位を抱いて「パリの社交絵巻」に登場しているのを見て、それまで考えることのなかった成功の概念をもつようになるためでもある。離婚・愛人との離別を経て、アンディーンはニューヨークでは自分が「商取引の能力のない」「価値の下がったコインのよう」になったことを認識し、人生のふりだしにもどってヨーロッパを目指す決意をする。

成功を求めるアンディーンの開いがふりだしにもどったことは、かつてカンサスからニューヨークを目指したときのように、彼女がヨーロッパへの旅に両親をとまなうことに象徴されている。だが、その渡航費として、恋人時代にピーターから贈られた宝石を売り払った金を充当し、彼女はその闘う力を増強したことを示す。父親がその宝石をピーターに返却することを迫ったにもかかわらず、内緒で金に変換し、彼女はそれの抜け目なさにおいても父親をこえている。父親のビジネスでは不道德となる男女間の取引が、アンディーンにとっては、自分の身体を提供して稼いだ「正当な」報酬となる。

アンディーンがヨーロッパ貴族と結婚するためには、その関心をとらえることが第一条件である。アンディーンは自らの常套手段を使ってこの最初の関門を軽く突破している。相手の欲求に合わせて自在に変身できる彼女は、レイモンに出会った当初から、ヨーロッパ人の心を打つにふさわしい美を演出する。彼女がレイモンを魅了する瞬間を目撃したボーウェンは、その美しさが「露にぬれたような新鮮さ」を帯び、今までにない「新しさ」を放っていると思う。アメリカでは、「誰の目にも見える明るい光を浴びすぎて」、「どぎつすぎる」と思えたアンディーンの美しさが、ヨーロッパでは「詩の翼で彩られ、その影が彼女の両目に漂っている」と感じている。「話し相手が期待するような人にその場である本能」によってその心を掴むことは、アンディーンにとって、ヨーロッパにおい

でも自分の思いどおりに生きる基本戦略となる。

外国人を意のままに操るためには、その国の慣習を理解することが最低条件である。アンディーンはこの条件を確実に満たしながら、レイモンとの結婚計画を進める。男性の心を掴んでも、フランスの慣習では、それがすぐに結婚に結びつくものではないことを「十分に知り抜き」、レイモンが結婚するつもりでなければ「彼を諦める」「決意を固めている」。

知り合った当初、ピーターの愛人であったアンディーンは、レイモンの「主な価値」を「ピーターの嫉妬をかりたてる力」に見る。レイモンの愛情が自分の将来に「実質的な収穫」をもたらさないことを理解し、彼と「いちやつくこと」の「実利面」のみに関心を向けている。「度重なる失敗の苦渋」を味わったのちに、新たな「収穫」を求めるアンディーンがレイモンの前で演じるのは、「結婚外の愛を認めることができない、清廉潔白で恐れを知らないアメリカ女性」である。愛人の情熱をかりたてる「拍車」であったレイモンを夫に昇格させるために、アンディーンは、かつて「いちやついていた」同じ相手に、「清廉潔白さ」を強調することになる。

レイモンに対して「清廉潔白さ」を強調することは、アンディーンが宗教でさえも自分の目的のために利用することでもある。「社会的に卓越した」男性と結婚することで自らの成功を確認するために、彼女は男性を操る道具として宗教を臨機応変に利用する。彼女はじつさい、レイモンに対して「ミリタント・プロテスタントの激しい反応」をもって結婚内の愛をアピールしながら彼の宗教を賞賛する態度をつらぬき、結婚承諾の用意ができているところをほめかしている。

アンディーンの宗教に対する柔軟さは、幼友たちの「信仰」と比較するとより明らかになる。彼方への夢をと

に育んだカンサス時代の友だちは、離婚が成立しないうちに愛人のもとに走ったアンディーンを非難し、ニューヨークが彼女を「墮落させた」と主張する。「簡単な離婚」を推奨する一方、不倫愛を墮落とみなして一刀両断するこの幼友たちは、アメリカのプロテスタンティズムが形骸化に陥っている状況を示す。結婚内の愛のみを強調する形骸化であり、その状況は「アベックス流ピューリタリズム」という風刺的な表現に集約されている。

アンディーンは、幼友たちの非難に対して、「私は不道徳な女ではない」と反駁して内なる純粋さを強調する。彼女はたしかに、「獐犢な欲望」を実現させる「冷徹な粘着力」の陰に純粋さを秘めており、このことは、彼女がニューヨークの友人やパリの友人とのあいだに感じる距離感にも表れている。前者は、「ピーターが確実ではなかった」のにラルフと離婚したことを「ヘマ」とみなしてアベックスと「逆の論理」で迫り、後者は、「離婚したばかりのアメリカ女性」として「より自由」になったことを礼賛する。アンディーンはいずれにも違和感を覚え、とくに後者に対しては、「アベックス流ピューリタリズムの反発」を感じている。問題は、彼女がこのような純粋さを秘めながらも、男性を射とめる計画のなかでは、宗教にも適宜の処置を施すことである。

じじつ、彼女はフランス貴族レイモンと結婚するために、「人目を引くようなかたちで夫の信教に改定する」。その一年後、つぎの男性として億万長者のアメリカ人エルマーを選ぶときには、カトリックであることを理由に結婚外の関係を主張している。幼友たちは、「結婚外の愛を認めることができない」プロテスタンティズムを厳密に実践し、離婚・再婚をくり返しながら己の上昇をはかるが、より高い上昇を目指すアンディーンは、宗教にも伸縮自在な態度をつらぬく。金さえあれば、ローマ教会をも買収でき、再婚の許可をもらえると信じて行動するところにも、アンディーンの宗教に対する姿勢が顕著に表れている。

アンディーンが伸縮自在な態度をとるのは、宗教に対してばかりではない。自分の産んだ子どもに対して、彼女は同様の態度で接する。そのときどきの感情で対応し、最終的には、自分の成功を勝ち得る秘密兵器として子どもを使う。彼女はラルフとのあいだに男の子を一人もうけるが、新婚旅行中に妊娠が判明したときから、子どもを自分の人生を妨害する「厄介なもの」と考える。子どもを産むことで自分の美が損なわれることを嫌い、その養育も人任せにして、ラルフとの離婚にあたっては養育権を主張することもない。アンディーンにとって「余分な荷物」にしかすぎなかったその子どもが、レイモンとの結婚作戦では、利用すべき存在になる。子どもは、金を生みだす最終兵器となり、アンディーンのゲームを成功に導く鍵となる。

再起をかけてわたったヨーロッパで、アンディーンは父親のもとに残してきた子どもを自分の社会的評価をあげるための手段に利用する。レイモンの求愛に「快楽」を感じ、「ふたたび若くなり生きている」実感をもちながら、彼の従姉には母親らしいポーズをとる。「私のような立場の女性が噂になりやすいことはわかっています、私には斟酌しなければならぬ小さな男の子がおります」と言い、子どもを使って堅実な離婚女性のイメージを作りあげている。彼女にとって子どもは、母親であることが自分に役立つときには、「斟酌すべき」存在となる。

アンディーンは、レイモンに「宗教的な結婚」の決意を促す手段としても子どもをも利用する。アンディーンがレイモンと結婚することは、離婚を認めないカトリックの教義からいえば重婚罪を犯すことになり、ローマ法王による「結婚の無効」の裁定が必要となる。アンディーンは、気まぐれに子どもを思っ流した涙によって、レイモンから「結婚の無効」という魔法の言葉を引き出すことに成功する。フランスには「闘うことのできない伝統があり、そのような伝統があることをうれしく思っていた」に違いないレイモンを、結婚へと導いている。子ども

のことを伝える手紙を読んで感傷的になり、「父親になってくれるよい男性に会うことができさえしたら」と涙を流すが、それがレイモンの決意に有効に働いたためである。アンディーンは子どもを借りてレイモンの後ろ盾を獲得し、離婚女性の結婚を認めない「厳しい」フランス社会に「宣戦布告」している。

フランス社会の伝統と闘うためにアンディーンが最終的にたどり着くのは、息子を金に変換するゲームである。彼女は離婚に際して望むこともなく息子に関するすべての権利を得ていたが、そのことを盾に、「結婚の無効」手続きに必要な金を前夫のラルフから得ようとする。ラルフが息子を生き甲斐にしていることにつけ込み、彼が「子どもを買い戻す」ために多額な金を支払うことを見込んでのことである。アンディーンは教会を買収するための金策をエルマーに頼んでこのゲームを提案され、それを実行に移している。ラルフ一家を動かして金をださせ、座って小切手を待つていればよい、というエルマーの忠告どおりに行動し、彼女は、結局、「欲しいと思ったものを手に入れている」。エルマーの提案でアンディーンがゲームを実行することは、「英雄」の方が「怪物」よりも無慈悲であることの証でもある。

アンディーンが子どもを利用して挑むゲームは、挑まれたラルフ側の視点で語られるため、彼女の真意を詳細にたどることはできない。読者が知り得るのは、ラルフやその従妹が行うアンディーンの行動分析である。だが、結果としては、彼らの分析どおり、アンディーンは子どもを盾に多額の金を手にし、自らの再々婚を勝ちとっている。彼らの分析をこえる「勝利の深い満足感」さえアンディーンは味わっている。子どもを守る金を作ろうと投機に手をだしたラルフがその結果を柔軟に待つことができずに自殺するためである。その自殺は、エルマーからアンディーンとの過去を知らされたラルフが、彼女の「巧みで意図的な」嘘にショックを受けた結果でもある。「こうして

死ねば、妻も安泰だ」と言つてこめかみにピストルをあてるラルフは、文字どおり、命をかけて家族のために金を作つたことになる。

アンディーンは、ラルフの死後、彼が子どもを「買い戻そう」として投資していた百万ドルの金だけでなく、子どもに遺された彼の財産すべてをも手にする。ラルフが死んだことで重婚罪の罪を問われることもなく、「宣戦布告」していた人びとも和解して、計画どおり、「侯爵夫人の冠」を抱いている。和解の要因には、ラルフが作つた金によつて、アンディーンがフランス貴族の経済的危機を救う金持ちのアメリカ人の地位を獲得したことも、当然ながら含まれる。アンディーンはニューヨーク上流社会を踏み台にして、ヨーロッパの貴族社会を征服したことになる。彼女が踏み台にできたのは、男性は家族が必要とする金を調達すべき、というアメリカの慣習があるからにはかならない。

ラルフの死によつて「解放され」、すべての望みを叶えたのち、アンディーンは彼に死んで欲しくなかつたと思う。特注の「上品な」喪服らしきものを着て弔意を表し、ラルフの死という犠牲を払わずに自分の成功を勝ち得ることができたからよかつたと思ひ続ける。だが、ラルフが「獐犢な欲望と冷徹な粘着力」をもつ元妻の要求に応えるために、必死で金策に走ることをアンディーン自身が目論んでいたはずである。彼女のラルフへの感傷は、自分の望みが叶つたからこそ生じるものといえるだろう。

その証拠に、彼女は子どもを金銭に変換するゲームをさらに続け、ラルフの実家から、五千ドルの養育費の支払いを受ける判決を勝ちとつている。アンディーンの改宗でその息子が「イエズス会の犠牲」になると考えたラルフの実家が養育権を求める裁判を起したことを受け、彼女が逆に養育費を要求した結果である。彼女は、母親とし

て養育権を認められたうえで、実家が養育権を求めるならば、養育費を払うべきという主張をしたことになる。ラルフの実家から養育費を受けとることは、彼女が家父長制のシステムを徹底的に利用していることでもある。「盗んだように」手に入れたことで、「何か他の方法で得たかったと望み」ながらも、彼女は「権利の熱烈な信奉者」として、金を得たことを正当だととらえている。

アンデインのヨーロッパを征服するゲームは、レイモンとの結婚で終ることはない。「国の慣習」を用いてニューヨークを攻め、自分が望んだ金を獲得したのち、彼女はその慣習をフランス人の夫に適用する。かつてラルフにしたように、多額の金を自らが美しく着飾るために散財し、夫を苦しめる。フランス貴族が所有して自慢できる美術品同様の役割を自ら果しながら、アンデインは自らの美を保つためさまざまな実験をも試みる。美しくあるために必要だとして、先祖伝来の家宝さえ売却するよう迫っている。「アメリカでは保持することができないもの売ることを恥だとは思っていません」と言い、男性は「女性が心配する必要がない収入を得て女性を満足させる」というアメリカの慣習どおりの役割を夫に求めている。

ヘンリー・ジェイムズは、『アメリカン・シーン』（二九〇七）でアメリカにおける女性の「優位性」（六五）を指摘している。二十年ぶりに故国アメリカを訪れ、約十カ月をかけて各地を旅行したときの印象を綴ったこの作品で、ジェイムズは「アメリカ中どこでも女性の方が男性よりも際だって立派な性格をそなえているようにみえる」（六四―六五）と書く。過去三十年にわたってアメリカが商業化を強めるなかで、商売に携わらない、「女性たちが作った社会によって生みだされた女性」が、「世界をだまし、征服した」（三四七）と言う。ヨーロッパとの比較のうえで、アメリカ上流社会における男性の不在を指摘し、男性がビジネスに没頭するあまりに、女性に「社会の無限

に広がる大きな空洞」(三四五)を明け渡さなければならなかったととらえている。アメリカ女性の「財産」をいたるところに見つけることができるから、「もしできれば」そのような女性を受け入れないように(三四七)と、ジェイムズは皮肉をこめて語っている。

ジェイムズがアメリカ女性にこのような印象を抱いた二十世紀の初頭は、「新しい女」現象とともに、女性像に際だった変化がみられたときであった。「小さい」「可愛い」「繊細な」などと形容されるヴィクトリア朝的女性像に代わって、チャールズ・ギブソンが描いた挿絵「ギブソン・ガール」に象徴されるような、戸外で活動する長身の女性像が台頭し始めた時代であった(佐藤 三二)。女性がアメリカを表象するイメージとして用いられ始め、「アメリカン・ガール」という、ヨーロッパの女性と異なった、健康的でたくましい女性像が強調された時代でもあった(三二)。人気挿絵画家ハワード・チャンドラー・クリステイによる『アメリカン・ガール』(一九〇六)なるアメリカ女性を賛美した大衆本も出版され、そのなかでは外国をも「征服する」アメリカ女性の魅力が謳われている(三二)。「もし全世界がエスぺラント語を話すのであれば、ミス・アメリカの征服には際限がない……外国貴族たちの心をとらえたのはアメリカのドルばかりではない」(二〇一)と。

アメリカ国家と同じイニシャルをもち、アメリカの慣習をもつてニューヨーク上流社会、フランス貴族社会とわたりあうアンディーンのような女性が描かれたのは、このような時代背景があつてのことである。アンディーンの子どもへの態度は、女性に一樣に母性を求める伝統への疑問を呈して時代を先取りし、それが当時の書評で「怪物」と評される大きな要因でもある。彼女の成功は、人をだまし操ることで達成されているが、それはアメリカの男性文化の継承であると同時に、そうしなければ自分の望みを達成できない女性の立場を示すことでもある。アンディ

ーンは、アメリカがビジネスの国として拡大を続ける過程で生みだされたたくましくアメリカン・ガールであり、その力をヨーロッパへも拡大している。ジェイムズがアメリカ女性に抱いた印象は、アンディーンを彷彿させるが、彼女がビジネスの手腕で「世界を征服している」のが皮肉である。

「アメリカン・ビューティ」とは、アメリカを表象する茎の長いバラのことである。ジェイムズは『アメリカン・シーン』において、当時、次つぎと建設されていたニューヨークの高層建築を、アメリカが品種改良を重ねて作りだしたこの大輪の赤いバラに譬えている。『科学』が金を儲けることに適用され、袖の奥からより強い札をテールの上におけば、すぐに待ち構えていた運命によって切り落とされる」（七七）と述べ、拡大を続ける商業主義の産物である摩天楼のもろさを、人工的なバラの運命に重ねて指摘している。

一つの大きな花を咲かせるために、その他のつばみをすべて切り落として栽培されるアメリカン・ビューティは、当時のアメリカを席卷していた、社会ダーウィニズムの適者生存の原理を説明するためによく用いられた（難波江 一二六、ダイクストラ 二七五）。アンディーンは、『歓楽の家』のリリー同様、このバラに譬えられるようなアメリカを代表する美しい女性である。リリーが金儲け一辺倒の新時代に適応できずに茎を折られるのに反して、アンディーンは自らの美をしたたかに利用して茎をさらに伸ばしている。ジェイムズの予言に反してニューヨークが次つぎと摩天楼を拡張していくように、アンディーンは膨張し続けるアメリカの商業主義に身を寄せてその美しさを天に誇っている。アメリカを表象する美しさは、大衆を犠牲にして作られたリリーの「絶妙な」美から、犠牲になる運命をはねのけて「どぎつい光」のなかで映えるアンディーンのたくましい美へと変わりつつあったのである。

V 社交ジャーナリズムの女旗手

結婚することで社会的・経済的上昇を目指すアンディーンのコنفイデンス・ゲームは、彼女の情報収集とその操作能力が成功の決め手になっている。彼女はおもに社交ジャーナリズムをうまく活用することによって、自らが挑む人生ゲームを限りなく上昇させる。社交界の生活様式やゴシップなどを伝える新聞や雑誌を購読することで、アメリカ東部の社交界に参入する夢を抱き、じつさいに乗り込んだニューヨークでは、上流階級の内部情報に精通するマッサージ師ヒーニイをやとって自分に欠落した情報収集に努めている。

ヒーニイの役割は、本業であるマッサージやマニキュアを施すことよりも、彼女が収集・蓄積した社交界の情報を知らせることにある。社交新聞などの切り抜きがぎっしり詰まったそのカバンは、彼女が情報売るセールス・ウーマンであることの象徴である。階級をこえようとするアンディーンの野心はヒーニイが売る情報によって助けられ、彼女はアンディーンの「操縦者」とさえ呼ばれている。

フランス貴族と結婚・離婚する際にも、アンディーンはジャーナリズムを自分の味方に引きつけて切り抜ける。カンサス生まれのアンディーンが、ニューヨーク、ヨーロッパと征服し、大西洋をまたにかけた生活ができるのは、彼女がいかに当時の社交ジャーナリズムとかかわり、いかに情報を収集・処理したかということが大きく作用している。小説の始めと終りにヒーニイが登場し、社交新聞の情報を売るシーンがくり広げられるが、これはアンディーンの人生が社交ジャーナリズムとかかわること成り立っていることの証である。ヒーニイの切り抜きはじつさいアンディーンがヨーロッパ滞在中も有効に活用されている。

『国の慣習』では、とくにニューヨーク征服後のアンディーンの人生の変化が新聞の見出しで説明されている。ラルフは地下鉄の隣席に座っていた男が読んでいた新聞の見出しで自分の離婚の原因を知り、読者はアンディーンとのフランス貴族との結婚作戦を同じく新聞の見出しで知らされる。彼女がレイモンとの離婚をネバダ州リノで勝ちとり、その十五分後にエルマーと結婚することも、読者が知るのは新聞記事をとおしてである。主人公の人生の決定的事項が新聞記事で知らされることは、二十世紀初頭のアメリカでは、結婚や離婚などの個人的事柄が、公的に報道されるニュースとして商品価値をもっていたということである。同時に、主人公がそのようなジャーナリズムをいかに活用して人生を歩んでいるかを示すこともある。

アメリカにおける社交ジャーナリズムは、一八八五年にE・D・マンによって発刊されたニューヨークの雑誌『タウン・トピックス』⁽⁶⁾がその興隆のきっかけを作ったとみられる。この週刊誌は、当時、大手の都市新聞の日曜版に対抗するかたちで生まれた『センチュリー』や『ハーパーズ』などと並ぶ「大きな十セント雑誌」の一つである。ウォール街の金融ニュースなどとともに「クラブニュースやゴシップ」を掲載して新しさを謳い、その社交コラム「サウンタリングス（逍遙）」を呼び物にしていた。その作者は、『タウン・トピックス』こそ、社交ジャーナリズムのパイオニアであると主張し、その発刊以前には「ニューヨーク社交界がニューヨーク新聞界の関心を引くことはなかった」と書いている。それが一八九一年には、「ニューヨークのほとんどすべての新聞の日曜版が、社交界の人びとの動向や生活習慣に一ページ全部を割く」ようになり、自分のスタイルが入念に模倣されていると訴えている。

『トピックス』のコラムニストが書くように、二十世紀への転換期には、社交界の動向やその生活様式が新聞や

雑誌でさかんに報道されるようになった。そのような報道によって、上流階級の人びとは有名人になり、巨大なる商業的民主主義国家の模範的成功者として、「アメリカ社会の最高の人びと」を象徴する存在になったのである。

『国の慣習』は二十世紀初頭の十数年間に設定されているが、社交ジャーナリズムはアンディーンの人生を決定するものとなっている。彼女がニューヨーク社交界に入ることを成功の証とみなすのは、それを「目もくらむほど金に満ちた世界」として報道する社交ジャーナリズムの影響を強く受けているためである。「最高のものが欲しい」という彼女の望みは、「アメリカ社会の最高の人びと」として報道される社交記事を読むことによって形成されている。彼女は特権階級の人びとの行動や習慣を記事で読んで憧れを募らせ、自らが羨望的になることへの野心を抱く。不特定多数の観客を擁したメディアの舞台のうえでその人生を歩むことは、大勢のなかで目立つことに最高のものを求める彼女の望みを理想的なかたちで叶えることになる。

彼女自身が実感する成功は、社交ジャーナリズムの熱心な読者という立場から、自分自身が報道される対象になることではかられる。ラルフとの婚約がニューヨークの「すべての新聞で報道された」ことで感じる「甘美な感覚」こそ、彼女がはじめて勝利を実感するときである。彼女はやがて、ヒーニーが彼女の切り抜きを入れる専用カバンを別に作る必要を感じるほど報道されるようになる。

アンディーンが社交ジャーナリズムの影響で社交界への野望を抱くようになるには、とくに記事の内容が女性読者の模範となるべく機能していたことにある。二十世紀への転換期には、社交婦人の公的場所への参加が増えただけでなく、その詳細が新聞・雑誌に報道され、読者の熱い関心を呼んでいた。上流婦人のファッション、趣味、生活様式などが、女性の模範として読者に提供されるようになったのである。彼女たちの日常が詳細に描写される

ばかりでなく、家の運営や装飾などについての意見も、写真入りで掲載された。有名な金持ちの生活様式を報道するジャーナリズムが、快適な生活とともに、進歩と文明を謳う消費資本主義を宣伝する役割を果たしていたこともある。

アンディーンは、このような宣伝をまともに受けて上流社会の生活様式を模倣し、その社会への参入を夢みるようになる。その模倣は仔細なところまで及び、彼女は日曜版の「淑女の部屋のおしゃべり」欄によって、「もつとも賢い女性」が使うべき最新流行の用箋の色を知り、同種のを大量注文している。「上流社会の女性の一日」という記事で、上流婦人が朝食にココアをベッドで飲むことを習えば、自らも同じことをしている。

アンディーンの実在する本能は、生活全般の模範を示すジャーナリズムによって、その生活のいたるところに発揮されている。「日刊新聞を浴びるほど読んで」名士の御曹司の身体的特徴まで習い覚え、そのいずれかと結婚することを夢みる彼女にとって、上流婦人の生活を伝える記事は、花嫁学校の教科書として機能する。教科書はつねに「最新流行」を強調して彼女の消費を推進すると同時に、上流階級のマナーを指導して階級の大衆化に寄与することになる。

上流婦人の生活を仔細に報道するジャーナリズムは、女性を商品として見せることでもある。アンディーンは女性を見せるジャーナリズムを教科書にして自分を効果的にみせる技を磨き、ニューヨークへ出てから二年でラルフの求愛を受けるに至る。彼の心を引く演出法はすでに述べたとおりだが、見せることに徹するその姿勢こそ、アンディーンが自分のゲームを成功に導く秘訣である。五番街をみおろす高級ホテルに両親をもたって長期滞在すること、父親にねだって金曜日のオペラボックスを買うことなどは、最新ファッションに身を包むことなどと並んで、

アンディーンが自分を見せて売りだす手堅い方策である。じつさい、彼女がラルフの目をとらえるのは、自分が滞在するホテルで開かれたパーティにおいてである。

社交ジャーナリズムは必ずしも現実社会を映しているわけではなく、それを教科書として行動するアンディーンは、ほんものを識別できないという問題にも直面する。彼女は名士婦人による講演会で「魅力とは何か」について学んだり、「キスはいつストップしなければならぬか」という小説などを読んだりして、情報の補足に努める。このような補足はヒーニーによっても成されるが、彼女はじつさいの場面では、「最高の人びと」よりも社交画家や新興成金により深い感銘を受けてしまう。「より身分が高い」ラルフよりも、社交画家に「自分が日曜版で読んだ世界の要所にいる人」という印象をもち、彼女は「思いもよらないような社会階層」に困惑する。彼女の困惑は、その収集する情報が真実を伝えるものでも、真実をみきわめる力を磨くものではないことを示している。アンディーンの情報収集源は、そのくだけた言葉遣いとともに、彼女が階級をこえるゲームに挑んでいることの証でもある。報道と現実とのギャップは、彼女がラルフの姉の家を訪れたときにもつ「みすばらしい」という印象にも表れる。その印象は、ラルフとの結婚後すぐに彼女が「日曜版のヒーロー」である新興成金のピーターに心を移ことの伏線にもなる。光や鏡などの人工的な輝きのイメージが象徴するように、彼女は社交ジャーナリズムが作りだす華やかな虚構に魅力を感じる新人類であり、ニューヨークの旧家の人びとが喜びをみいだす地味な調和を理解することはない。やがては自らが嘘を紡いで次つぎと虚構を作りだし、虚構のジャーナリズムを舞台として自分の人生を生きるようになる。

女性を見せるジャーナリズムの時代を生き抜くには、紙面上における自己演出が重要になる。アンディーンはラ

ルフと結婚後、報道される自分のイメージを自分で作りあげることには力を発揮する。彼女はプレス・エージェントを雇い、自分に対する世の中の評判を自分で操作する。自分の肖像画ができあがれば、自らエージェントに電話して報道されるように手を打ち、報道されて都合悪いことは嘘の情報を通して身を守る。ラルフは自分の離婚原因を「ビジネスに没頭しすぎて家庭を幸せにすることができない」という新聞の見出しで知るが、これはアンディーンが世評を操作するためにとった措置である。彼女は本来の自分とは異なる、有名人としての仮面を紙面上で作りあげ、それを自分の上昇ゲームに利用していることになる。

当時、上流婦人とプリント・メディアとの関係は、ビジネス協定のように相互利益を追求する姿勢を保つ場合が多く、それが風刺漫画の対象にもなるほどであった。積極的に活動し、自らの利益を追求する上流婦人たちは、自分たちのプライヴァシーを公衆に提供する代わりに、メディアを自分の目的のために利用し、意見操作のためにプレス・エージェントをやとったりしていた。アンディーンは上流社会の「侵入者」であるにもかかわらず、または侵入者であるゆえに、プライヴァシーを報じるジャーナリズムをたくみに操作する。ニューヨーク「原住民」であるラルフなどは、そのような報道の被害を受けるのみである。

レイモンとの結婚・離婚においても自分に都合よい情報を積極的に新聞社に提供し、世評を操作している。結婚に際しては、法王が「結婚の無効」を認めるとの自信をインタビューで自ら長々と語り、離婚に際しては、夫の「残虐さ」を訴えている。「パリの社交総巻」に入ること成功の証をみだしていたアンディーンが、地方の城に押し込められたとき、さらには使わべき金がつねに足りないという状況に直面させられたとき、夫の仕業は彼女にとって「残虐」そのものとなる。フランス貴族と結婚するという「アメリカ人には閉ざされていたドア」に入るこ

との意味はなくなり、彼女は「少女少女のロマンスを復活させる」ために「由緒ある爵位を捨てた」潔い女性というイメージを紙面上で演出するのである。

『歡樂の家』のリリーは、事実無根のスキヤンダルを新聞に書きたてられ、弁明もせず自殺するが、アンディーンは、自分を優位に導く話を自ら語って報道させ、自分本位の人生を生き抜く。社交ジャーナリズムの扱いこそが、新旧二人の女性の明暗を分けている。

『国の慣習』の最終章で、ヒーニーは、アンディーンの子に新聞の切り抜きで母親の離婚と結婚のいきさつを知らせている。九歳になった息子は、自分の生活にも変化をもたらず、母親の身に起った重大事を新聞報道によって知らされる。母親が離婚再婚を重ねるうちに彼は「アメリカでもっとも金持ちの少年」となるが、忙しく飛びまわる母親とは、直接コミュニケーションをとる時間がほとんどない。寂しさを紛らわすために読む母親についての新聞も、母親の嘘を見破るだけのものとなる。母親が大勢の前でレイモンのことについて「ものすごい嘘」を言ったことを発見して、混乱した気持ちになっている。息子は幼くして、母親と社交ジャーナリズムとの関係の本質に直面している。

アンディーンは最新のメディアをも自分のゲームに利用し、自らが挑む上昇ゲームの勝利者である。だが彼女は、ゲームの勝利者でありながら、同時に犠牲者でもある。男性を踏み台にして富も名声も手に入れるが、彼女はこれらの結婚においても幸せをみつけることができない。「ロッキーマウンテンの東における六人の富豪の一人」になったエルマーとの結婚によって、欲しいと思った以上のものも手に入れたと感ずるが、つねに幸せというわけではない。夫が満足感をもって仕事に邁進する一方で、妻の方はそのような満足感とは無縁である。

彼女が離婚した二人の夫と結婚間もないエルマーとを比べ、つねに前者一人に軍配をあげているということは、彼との離婚も近い将来に起こり得ることである。「そのことについて知れば欲しいと思うものが他にあるかもしれない」と感じているように、彼女は同様のゲームを今後も続けなければならないであろう。結婚が欲しいものを手に入れる唯一の手段である限り、彼女は離婚と結婚をさらにくり返さなければならない。彼女は結婚をゲームにしなければ夢を達成できないという意味で、女性にそのような手段しか許さない「国の慣習」の犠牲者である。

アンディーンが「国の慣習」を逆手にとって利益を得るコンフィデンス・ウーマンでありながら、その犠牲者であることは、夫たちとの関係に表れている。彼女は男性をだまして人生を歩みながら、自分こそがいずれの結婚においても「罠にかかった、だまされた」と感じている。相手こそ違っても、男性権力の横暴さに忌避感を募らせている。ラルフはアンディーンをつねに子ども扱いし、粗野な彼女を磨いて自分の理想の女性に作り変えようとする。ピグマリオンのように自分の型にはめようとする夫に対してアンディーンは、「アメリカの女性は古い規則について知る必要はないと思います」と言い、自分自身の規則に従うことを宣言する。結婚が修復できない状態になったとき、ラルフは互いを「結婚の破滅における犠牲者同士」と呼ぶが、犠牲者は妻に振りまわされたラルフだけではない。夫が理想とする人形のような女性になるよう強制されたアンディーンも同様に犠牲者である。

このような状況はレイモンとの結婚生活においても続き、彼女はフランス人の夫にラルフのイメージを重ねている。ラルフより嫉妬深く、妻の行動を逐一管理するような所有欲を発揮すること、アンディーンは独立感が失われる思いを抱く。「聖なる砂漠」を意味する邸宅に「強制的に隔離され」、彼女は「チャールミング」だと思えたフランス人の夫も、「前夫が悪夢のようなかたちで強調されたにすぎない」（アモンズ 三三五）ことを発見するのであ

る。欲しいものをすべて与えてくれるエルマーに対してさえ、彼女は結婚当初から、「支配権を行使し、そのことに有頂天になっている」と感じている。

こうしてみると、アンディーンของเกมは、ニューヨーク、ヨーロッパと征服しながらも、結果として、男性に征服され、その征服を逃れるためにさらにゲームを続けてきたことになる。「国の慣習」が変わらない限り、アンディーンはアメリカン・コンフィデンス・ウーマンとして、闘いを続けなくてはならないであろう。「アメリカ小説のなかでもっとも不愉快な女性」(ルイス 三五二)といわれた彼女は、「国の慣習」を逆手に果敢なゲームを続けながら、自らがその慣習のいちばんの被害者であることで、そのゲームはきわめて皮肉なものになっている。

だが、二十世紀のはじめにアンディーンのような闘う女が登場したことは意義深い。女性が自分の足で立ち、男性と平等のパートナーシップを築く時代のさきがけとして、ウォートンがアンディーンを描いていることは間違いない。アンディーンは、その「獰猛な独立心」を自分の力で立つための自己陶冶に活用することなく、自分では意識しないながらも、「国の慣習」への復讐に向ける。復讐である限り真の独立はなく、それを達成するためには、彼女が自らの独立心をアメリカの慣習を乗り越えるために使わなければならない。アメリカン・ガールのおもな特徴が、自立・自助にあるとするならば(クリステイ 二五)、アンディーンは、アメリカン・ガールが自らの経済的自立を達成することで、ほんとうの意味での独立を達成する過渡期に生まれたコンフィデンス・ウーマンといえるだろう。ウォートンは「上昇」するためにしゃにむに闘うアンディーンを描くことで、アメリカの古い慣習への挑戦状をつきつけたのである。

注

- (1) 引用部分の邦訳は、『ちよつと見るだけ』については高山宏訳を参照。その他は拙訳。
- (2) アメリカで認められた離婚件数は、一八八〇年から一九〇〇年のあいだに二倍に増え、一九二〇年までにはさらにその二倍以上に増えた（マッコウム 七七二）。離婚率は、一八八〇年には千人に〇・四人だったものが、一九〇〇年には〇・八人に、さらに一九二〇年には一・七五人となった（七九三）。
- (3) ウォートンは、夫が金持ちになったために無為に過ごすアンデインの母親をとおして、「顕示的閑暇」（ヴェブレン 六三）を強いられる女性の不幸も描いている。母親はかつて自分がしていた家事を用人に任せ、何もしないことで夫の経済力を誇示する役目を担っている。
- (4) 『歓楽の家』に登場する「新興成金」のサイモン・ローズデイルもエルマー同様のイメージで描かれている。
- (5) プレストンは、エルマーの実在のモデルとして、その仕事ぶりから「ウォール街のメフィストフェレス」と呼ばれたジェイ・ゴールドをあげている（一一〇）。
- (6) 本章における社交ジャーナリズムの歴史的事実に関してはモンゴメリー（二四—五二）を参照。

引用文献

- Ammons, Elizabeth. "The Business of Marriage in Edith Wharton's *The Custom of the Country*." *Criticism* 16 (1974): 326-38.
- ボードリヤール、ジャン 『消費社会の神話と構造』 今村仁司・塚原史訳 紀伊国屋書店 一九九五年
- Bowlby, Rachel. *Just Looking: Consumer Culture in Dreiser, Gissing and Zola*. London: Methuen, 1985. 『ちよつと見るだけ』 世紀末消費文化と文学テクニクス』 高山宏訳 ありな書房 一九八九年
- Christy, Howard Chandler. *The American Girl: As Seen and Portrayed by Howard Chandler Christy*. 1906. New York: Da Capo, 1976.
- De Grave, Kathleen. *Swindler, Spy, Rebel: The Confidence Woman in Nineteenth-Century America*. Columbia: U of Missouri P,

- 1995.
- Dijkstra, Bram. *Idols of Perversity: Fantasies of Feminine Evil in Fin-de-Siècle Culture*. New York: Oxford UP, 1986.
- French, Marilyn. Introduction. *The Custom of the Country*. By Edith Wharton. New York: Berkley, 1981. v-xxix.
- Gilman, Charlotte Perkins. *Women and Economics: A Study of the Economic Relation Between Men and Women as a Factor in Social Evolution*. 1898. New York: Prometheus, 1994.
- Hays, Peter L. "Undine Is Us: Wharton's Attack on American Greed." *Etudes Anglaises: Grande-Bretagne, États-Unis* 47.1 (1994): 22-31.
- James, Henry. <1> *American Scene*. Bloomington: Indiana UP, 1968.
- . <2> *Hawthorne*. New York: AMS P, 1968.
- Joslin, Katherine. *Women Writers: Edith Wharton*. London: Macmillan, 1991.
- Lawson, Richard H. "Undine." *Edith Wharton*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea, 1986. 29-38.
- Lewis, R.W.B. *Edith Wharton: A Biography*. London: Constable, 1975.
- MacComb, Debra Ann. "New Wives for Old: Divorce and the Leisure-Class Marriage Market in Edith Wharton's *The Custom of the Country*." *American Literature* 68.4 (1996): 765-97.
- Matthiessen, F. O. *Theodore Dreiser*. United States: William Sloane Associates, 1951.
- Montgomery, Maureen E. *Displaying Women: Spectacles of Leisure in Edith Wharton's New York*. New York: Routledge, 1998.
- モンテニーユ・ミッシェル 『モンテニーユ随想録』 関根秀雄訳 白水社 一九八五年
- 難波江仁美 『お国の慣習』—二十世紀のアメリカ像』『イーディス・ウォートンの世界』 別府恵子編著 鷹書房ラブレス 一九九七年 一二五—四四頁
- Preston, Claire. *Edith Wharton's Social Register*. London: Macmillan, 2000.

- 佐藤宏子 「アメリカン・ガールの形成（１） アメリカン・ガールとは？」『英語青年』一二七号 一九九一年 三〇—三三頁
- Showalter, Elaine. "Spragg: The Art of the Deal." *The Cambridge Companion to Wharton*. Ed. Millicent Bell. Cambridge: Cambridge UP, 1995. 87-97.
- Tuttleton, James W. et al., eds. *Edith Wharton: The Contemporary Reviews*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- 山口ヨシ子ヘーヴ「元祖アメリカン・コンフィデンス・マン」『神奈川大学人文学研究所報』三十一号 一九九八年 一九—三五頁
- トヘン『鳩の翼』のコン・ゲーム』『連枝の世紀』 透土社 一九九〇年 一四九—九八頁
- Veblen, Thorstein. *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study of Institutions*. 1899. London: Allen, 1922.
- Wharton, Edith. *The Custom of the Country*. 1913. New York: Doubleday, 1998.
- . *The House of Mirth*. 1905. New York: Scribner's, 1914.
- Wolff, Cynthia Griffin. *A Feast of Words: The Triumph of Edith Wharton*. Reading, MA: Addison-Wesley, 1995.